

中島 敦

かめれおん日記





か  
め  
れ  
お  
ん  
日  
記



虫有虺者。一身兩口、争相齧也。遂相食、因自殺。

——韓非子——

一

博物教室から職員室へ引揚げて来る時、途中の廊下で背後うしろから「先生」と呼びとめられた。

振返ると、生徒の一人ひとり——顔は確かに知っているが、名前がとっさには浮かんで来ない——が私の前に来て、何かよく聞きとれないことを言いながら、五寸角位かくの・蓋の無い・菓子箱様ようのものを差出した。箱の中には綿が敷かれ、その上に青黒い蜥蜴とかげのような妙みような形かたちのものが載っている。

「何？ え？ カメレオン？ え？ カメレオンじゃな  
いか。生きてるの？」

思い掛けないものの出現めんとくに面喰めんくらって、私が矢継早やせに聞くと、生徒は「ええ」と頷うなずいて、顔を赭あからめながら説

明した。親戚の船員のものがカイロかどこかで貰って来たのだが、珍しいものだから学校へ持って行ってはと云うので、博物の教師である私の所へ持って来たのだという。

「ほう、そや、どうも」有難うありがととも言わないで、私はその箱を受取り、龍りゆうに似た小さな怪物を眺めた。蜥蜴よりもずっと立体的な感じで、頭が大きく、尾が長く捲き、寒さで元気が無いらしいが、それでも、真蒼まえあしな前肢で、しかつめらしく綿ふんを踏まえている。

生徒は私にカメレオンを渡してしまうと、それ以上私

の前に立っているのを羞はずかしがるように、ぴよこんと頭を下げてから行ってしまった。

職員室へ持って行ってから、始めて、飼育の困難に気がついた。学校には温室がない。取敢とりあえず火鉢そばの側の鉢植ほおの朴ほおの木の枝にとまらせた。はじめはジツと動かなかったが、その中うちに、傍わきの火の温かみで元気が出たとみえ、少しずつ動き出した。眼窩がんかはかなり大きいのだが、眼玉が外を覗く孔あなは極めて小さく、その小さな孔をぐるぐる方々に向けて廻まわしながら、その奥から見慣れぬ風景を探っているらしい。朴の枝から葉の方へと匍はい出しては



身体からだの重みで滑りそうになり、葉の縁を趾指あしゆびで搦つかんで支えようとするが、とうとう落ちてしまふ。何度も鉢の土だの床ゆかだのの上に落ちた。落ちる度に、自分の失策を嘲笑わらわれて腹を立てた子供のように真剣な顔付で起上つて、（背中に立っている裝飾風なギザギザが、ものものしい真面目な外観を与えている）めくらめつぼうに歩き出す。職員達はみんな珍しがって見にやって来た。大抵は、何ですかと不思議そうに訊ねる。国漢の老教師は、どう勘違いしたか、「それは何でも花柳病の薬になるやつでしようがな。蔭干かげぼしにして、煎じてな」などと言ひ出した。

誰かがどこからか蠅をつかまえて来て、かたはね片翅をもいでからてのひら掌あかいろにのせて前に出した。カメレオンの口からサツとうす朱色の肉の棒がくりだ繰出された。舌の先端に蠅がくつつくと同時に、もう口は閉じられている。

結局この生物いきものをどう扱おうかと、他の博物の教師達と相談する。どうせ長くは生きないだろうが、カナリヤの箱のようなものでも作って、なるべく暖い所へ置いて、このまま学校で飼って見よう。餌えさは、生徒等に季節外れの蠅でも探して持って来させれば、どうにかなるだろう、ということになる。しかし、とにかくその簡単な設備が

出来るまでは、夜の寒さと、猫などに襲われる心配のため、私が預かってアパートで養うことにした。

その夜、私は部屋の小型ストーヴにいつもより多量の石炭を入れた。この間死んだ鸚鵡おうむの丸籠おろを下して、その中に綿を敷き、そこへカメレオンを入れた。水を飲むものかどうか知らないが、とにかく、鳥の水入も中に置いてやった。

滑稽なことに、私は少からず悦ばされ、興奮させられていた。寒さなどのためにやがては死なせねばなるまい

との考えだけが私を暗くした。どうせ永く持たないのなら、学校で飼わないで、自分のところへ置きたいと思つた。動物園へ寄贈すれば、とも思つたが、何かしら手離すのが惜しい。まるで私個人が貰つたものであるかのようにな、私は感じているのであつた。

久しく私の中に眠っていたエグゾテイスムが、この珍奇な小動物の思いがけない出現と共に、再び目覚めて来た。かつて小笠原に遊んだ時の海の色。熱帯樹の厚い葉の艶<sup>つや</sup>。油ぎつた眩<sup>まぶ</sup>しい空。原色的な鮮麗な色彩と、燃上る光と熱。珍奇な異国的なものへの若々しい感興が急に

澆刺と動き出した。外はみぞれもよいの空だといふのに、私は久しぶりで胸の膨れる思ふくいであつた。

ストーヴの近くに籠を置き、室の隅にあつたゴムの木と谷渡りの鉢をその傍に並べた。私は籠の入口をあけておいた。どうせ部屋から出る心配はなし、時には木にとまりたくもなろうかと思つたからである。

## 二

朝起きて見ると、カメレオンはゴムの木などには止ら

ずに、机の下に滑り落ちた書物の上に乗って、小さな眼孔がんこうからこちらを見ていた。思ったより元気らしい。もつとも昨夕はかなり部屋を暖めたので、乾きすぎたせいか、私の方が少々咽喉を痛めた。カメレオンの乗っていた書物はシヨペンハウエルのパレルガ・ウント・パラリポメナ。

勤めの無い日なのだが、カメレオンのことで午後学校へ行く。昨晚考えたように、設備が無いのなら学校へ置いても同じことだから、私のところで飼わせてもらおうと思ったのである。まさか学校でも一匹のカメレオンの

ために温室を拵つくろえてはくれまい。

学校へ行つてその許可を求めると、校長はじめ他の職員達はもうほとんど昨日きのうのことを忘れていたかのような口吻くちぶりだった。「ああ、あの昨日の虫ですか！」という。私一人が、この小爬虫類の出現に狂喜していたただけだったのだ。

生徒達の所へ行つて、昨日頼んでおいた蠅を貰う。思いの外、蠅は生残っているものだ。マッチ箱に一杯集まった。之で二三日分の餌には足りるだろう。

蠅を持って帰ろうとしていると、後から国語の教師の

吉田が追いかけて来て、ちやうど自分も帰るからとて一緒に歩き出す。何か話したくてたまらぬことがあるらしい。M・ベエカリイに寄って茶を飲みながら一時間ほど話す。

私とほぼ同年だが、全くこの男ほど精力絶倫で思い切り実用向きで、恥も外聞もなく物質的で、懷疑、羞恥、「でわる」などという気持と縁の遠い人間を私は知らない。疲れる事を知らぬ働き手。有能な事務家。方法論の大家。（本質論など悪魔に喰われてしまえ！）常に勇氣凜々たる偏見に充ち満ちて、あらゆる事に勇往邁進する



男。運動会、展覧会、学芸会、校友会雑誌の編輯へんしゅう、その他何でも彼が一人で片付けてしまう。抽象とは彼にとつて無意味と同義である。今年の正月のこと、どこかの級のクラス会で、生徒が三四人、蜜柑みかんや煎餅せんべいを買出しに行った。学校の前は山手から降りて来る坂になっているのだが、その坂の中途まで、風呂敷包をぶら下げた買出し係の生徒等が上って来た時、一人の持っていた風呂敷が解けて、中から蜜柑がこぼれた。二つ、三つ、四つ：  
：七つ、八つ、かなり急な坂とて、鮮かな色をした蜜柑が続々ところがり出した。その生徒は思わぬ失策にひど

く顔を赭らめ、風呂敷を結び直すのがやつとで、転がる蜜柑を追いかけるどころではなかった。学校以外の人々の往来も相当にあるので、ちよつと羞はずかしかつたのであろう。ちようどその時坂の上に立っていた吉田は、これを見るや猛烈な勢いきおいで駈かけ下り始めた。小石を蹴とばし、砂利で滑りそうになり、つんのめりそうになり、途中に立つ生徒を突き飛ばして、短軀たんくの彼は背中を丸くして蜜柑を追いかけた。一度転んだがすぐ起上り、砂も払はらわずにまた駈け出し、とうとう十五六の蜜柑をことごとく拾い上げ、坂の片側の溝に転げ落ちることを防いだのであ

る。生徒等も通行人達も呆氣あつけにとられて立止り、彼の猛烈な勢に見とれていた。吉田は蜜柑を手に持ちポケットにも入れ、「みんなボヤーツと見とっちゃ駄目やないか」と生徒等に叱言こごとを言いながら、また登って来た。彼の顔が赧あかくなっていたのは、単に走ったからなのであって、決して、彼がでねていたためではない。正まさに、この男こそ、私の、もって模範とすべき人物だとその時、私はしみじみ思った。この男はいつも、人間は——あるいは、生物は——かく生くべし、と、私に教えてくれるのだ。高等小学生的人物と彼を評した者がいる。小学校の高等

科の生徒というものは中学生のような小生意気さが無く、実に良く働いて、中学生などよりどれほど役に立つか判らないというのである。影の薄い大学生よりも、潑刺たる高等小学生の方が遙かに立派だと、私も思う。

話をしながら、吉田は、内ポケットから一枚の紙を取出して私の前に広げた。私がそれを見せられるのは今日で二度目である。それはこの学校の全職員の俸給表で（私立学校で、職員録に明示されない）彼がどこからか聞き出して丹念に書並べたものだ。なお、前年度のボーナスの推定額まで、書入れてある。彼はこういう事を探り出

すことが実に上手じょうずで、またそれを自ら得意とくいとしている。

自分と交際のあるすべての人間について、彼は、一々興信所きんじょ的な方法で身許みもと調査を行っているものようだ。殊ことに自分が反感をもつ人間に対しては、執拗しつごうなほど徹底的に調べ上げて、彼等の疵きずを探し出すのである。この俸給表うちの中、彼よりも不当にも俸給の多い教師の名前の横には、赤鉛筆で棒が引いてある。彼はそれを誰彼に示しては、関西弁で縷々るるとして不平を陳のべるのである。

「割烹のTな、女のくせに僕よりたんと取りよるんや。はじめの交渉の仕方一つで、どうにでもなるんで、決

った標準は無いのやでなあ。目茶や、まるで。」  
この前に一度この表を見せた時も、同じような言葉で、  
Tという割烹の教師のことを言っていた。今見ると、T  
の名前の上だけは、赤鉛筆に副<sup>そ</sup>えて青鉛筆でも濃く何本  
か棒が引かれている。

「それで、あんまり目茶やから、僕、校長の所へ言い  
に行っただんですよ。とにかく此方<sup>こつち</sup>は教育を受けた年限  
も長いんやから、心臓が強い云われるかも知らんけど、  
なんぼでもよいからTさんより上にして下さい言うた  
んですよ。そうしたら、なるほど、もっともだから、

では、Tさんより三円だけ多くしまししょう、いうて。

三円やで。たった。それでも今よりは、まあ良いけど。」

吉田はその俸給表を前に拵げたまま、つづいて、職員  
の一人一人についてその経歴やら家庭的な事情やらを話  
し出した。女教師の中、誰と誰とは女高師を出たという  
触込ふれこみで来ているが、実は臨時教員養成所を出ただけであ  
ること。国語の主任をしているNが月給を二月分前借ふたつきし  
ていること。図画の老教師Hが表具屋、絵具屋等と生徒  
との間でえらくサヤを取っていること。英語のSが音楽  
の女教師と近頃よく連立って歩いているという噂のこ

と。他人の秘密を知っていることが吉田にとってこの上なく満足なような話しぶりである。彼の話によると、彼は今日、主任のNと何か口論したらしく、また別に、体操科の教師とも渡り合ったらしい。これは何でも先月行われた運動会のプログラムの進行に関して、吉田と体操の教師達との間に、当時、意見の衝突があり、それがまだこじれているものの由よしである。吉田という男は、事務に追われていないと、胃酸過多の胃が、消化すべきものを有もたない時の状態みたいになって、とかく他人ひととの間に摩擦を起すようだ。



一時間ばかり彼の話を聞いてから、余り愉快ではない  
気持になって、蠅の詰まったマツチ箱を持って帰る。

夜、外へ出て何気なく東の空を仰いだ時、私は思わず  
「アア」と声を出した。裸になった榎の大樹の枝々を透  
して、春以来、半年ぶりでもリオンの昇って来るのを見  
付けたからである。青い小さな蜜柑が出始めると、三つ  
星さまが見え出すんだよ、と幼い頃祖母によく言われた  
ことが記憶に甦った。オリオンの上には馭者座だの、  
紅いアルデバランだの、玻璃器に凍りついた水滴のよう

なすばるだのが、はつきりと姿を見せている。恒星達ばかりではない。南の空に高く、左から順にほぼ同じ位の間隔をおいて並んでいるのは、土星ザトウルンと木星ユウピテルと火星マルスとであろう。殊に木星の白い輝きの明るさは、燦々さんさんと、まことに四辺あたりを払うばかりである。

かなり冷えるけれども、風の無い静かな晩であった。

三つの惑星を見上げながら、私は、「詩デイヒトウング・ウント・ワアルハイトと真実」

の冒頭を思い出していた。そこには、この詩人が誕生した日の・瑞象ずいしやうに充ちた星座の配置が、自己の偉大さへの自信に溢あふれた筆つきで記されている。高等学校の理科

三年の時、第二外国語の教科書としてこの書物が使われ、この冒頭の所の訳読が私にあたったので、はつきり覚えられているのである。急に、教科書に使ったその本の緑色の表紙、それを金色で抜いた標題の文字、それを始めて手にした時の印刷インクの匂など、また、独<sup>ドイツ</sup>乙語の教師の風貌や、その声つき、それから当時の級友達のことまでが鮮かに頭に浮かんで来た。

青春への郷愁に胸を灼<sup>や</sup>かれるような思いをしながら、私は部屋に帰って来た。本棚や本箱をひっくり返して、まだ残っているはずの・昔使った「詩と真実」を探して

見たが、見付からなかつた。取散らかされた書物の間で、しばらくは、若さへの愛惜と、友情への飢渴きかつとに、じつとしてはいられないような・遣瀬やるせないともいうより言いのようなない気持であつた。

二三日前にもこんなことがあつた。ある文字を引こうとして英和辞典をバラバラと繰りながら、偶然開かれたページの Opera という文字に目がとまった時、私は、瞬間ハツと何か明るい華やかな若々しいものが前を過ぎたような気がした。田舎の暗い田圃たんぼ道みちから、土手の上を通つて行く明るい夜汽車の窓々を見送る時に似て、今ま

ですっかり忘れていた華やかな夢の一片が、遠い世界からやって来てチラリと前を通り過ぎて行ったような気がした。私がまだ学生の頃、当時は映画館でなかった帝劇に、毎年三月頃になると、ロシヤとイタリイから歌劇団が来演した。カルメンやリゴレットやラ・ボエームやボリス・ゴドノフなど、私は金銭かねの許す限りそれらを見に行った。明るい照明の中で、女優達の豊かな肩や白い腕うぶげに生毛うぶげが光り、金髪が揺れ、頬が紅潮し、肉感的な若々しい声が快く顫ふるえて、私を酔わせた。偶然目にした Opera という、たった五字が、失われた・遠い・華やか

な世界のかぐわしい空気をちらと匂わせ、しばし私を混乱させた。所要の文字を探すことも忘れて、私は Opera という字を見詰めたまま、ぼんやりしていた。

回顧的になるのは身体が衰弱しているからだろうと人はいふ。自分もそうは思う。しかし何といつても、現在身を打込める仕事を（あるいは、生活を）有<sup>も</sup>っていないことが一番大きな原因に違いない。

実際、近頃の自分の生き方の、みじめさ、情なさ。うじうじと、内攻し、くすぶり、我と我が身を噛み、いじ

け果て、それでなお、うすっぺらな犬儒主義シニシズムだけは残している。こんなはずではなかったのだが、一体、どうして、また、いつ頃から、こんな風になってしまったのだろうか？ とにかく、気が付いた時には、既にこんなへんなものになってしまっていたのだ。いい、悪い、ではない。強いて云えば困るのである。ともかくも、自分は周囲の健康な人々と同じでない。もちろん、矜恃きょうじをもっていうのではない。その反対だ。不安と焦躁とをもっていうのである。もの感じ方、心の向い方が、どうも違う。みんなは現実の中に生きている。俺はそうじゃない。か

えるの卵のように寒天の中にくるまっている。現実と自分との間を、寒天質の視力を屈折させるものが隔てている。直接そとのものに触れ感じることが出来ない。はじめはそれを知的装飾と考えて、困りながらも自惚うぬぼれていたことがある。しかし、どうもそうではないらしい。もっと根本的な・先天的な・ある能力の欠如によるものらしい。それも一つの能力でなく、幾つかの能力の欠如である。たとえば、個人を個人たらしめる・最も普遍的な意味においての・功利主義が私には欠けているようだ。また、ものを一つの系列——ある目的へと向って排列さ



れた一つの順序——として理解する能力が私には無い。一つ一つをそれぞれ独立したものとして取上げてしまふ。一日なら一日を、将来のある計画のための一日として考えることが出来ない。それ自身の独立した価値をもった一日でなければ承知できないのだ。それからまた、ものごと（自分自身をも含めて）の内側に直接はいつて行くことが出来ず、まず外から、それに対して位置測定を試みる。全体におけるその位置、大きなものと対比したその価値等を測ってみるだけで失望してしまい、直接そのものの中には行って行けないのだ。 sub specie

aeternitatis に見る、といったって、別に哲人がる訳ではない。それどころか最も平凡な無常観をもって見る——つまり、何事をも、（身の程知らずにも）永遠と対比して考えるために、まずその無意味さを感じてしまうのである。実際的な対処法を講ずる前に、そのことの究極の無意味さを考えて（本当は感ずるのだ。理窟ではなく、アアツマラナイナアという腹の底からの感じ）一切の努力を抛棄<sup>ほうき</sup>してしまふのだ。

考えてみれば、大体、今までの生き方が、まあ何という無意味な生き方だったか。精神の統一集注を妨げるこ

とにばかり費された半生といってもいい。とにかく私は自分を眠らせ、自分の持っているものを打消すことにはかり力を尽くして来たようなものだ。

かつて自分にも多少は感覚の良さがあつた時分には、私はそれにのみ奔<sup>はし</sup>ることを惧<sup>おそ</sup>れて、自分の欲しもしない・無味な概念のかたまりを考えることによつて感覚を鈍くしよう<sup>つと</sup>と力めた。そうして、結局すべての概念が灰色だと知つた時、また、自分が苦心の結果取除くことに成功したところのものが、いかに黄金なす緑色をなしていたかを悟つた時には、すでにそれを取返<sup>すべ</sup>す術を失つてい

るのだ。私がかつて、かなり確かな記憶力を有<sup>も</sup>っていた頃、私はこれを軽蔑した。記憶力しか有<sup>も</sup>っていない人間は、足し算しか出来ない人間と同じだと云い、自分のこの力を撲滅しようとした。これは随分無理なことだった。で、少くとも、これを利用することだけは避けるようにした。さて、人間生活の多くの貴い部分が、最も基礎的な意味において精神のこの能力に負<sup>も</sup>っていることを、身をもって悟るようになった今となっては、はや（種々な薬品の過度の吸入や服用その他によって）自分にそれが失われているのだ。

今でもそうだが、以前から私は、夜、床とこに就いてから容易ねむに睡れない。これは主に、この十年間一晩として服用ぜんそくしないでは済まない喘息の鎮静剤のせいなのだが、結局睡眠の時間は二時間か三時間位のもので、かえって、昼間は一日中ボウツとしている。床に就いてから眼が冴えてくるのに、私はそれでも無理に眠らなければいけないと考えて、恐らく私の一日中で一番頭のはつきりしているに違いない数時間を、眠ろうとする消極的な下らぬ努力のために費してしまふ。本当はそういう時こそ、色々な思想の萌芽といってもいいようなものが、どんどん湧

いて来るような気がするのだ。しかし、そんなものについて思考を集注し出したら一晩中興奮のために眠れないぞ、そうするとまた、明日は発作だぞ、と、私は躍気になって、そうした断片的な思惟の芽を揉み消して行く。

全く私はどれほどの多くの思索の種子を寢床の闇の中でむざむざと躪り潰してしまったことか。もちろん、私は思想家でも科学者でもないから、私のひよいひよいと浮かんで来る思いつきや断片的な考えが皆優れたものだったろうなどというのではない。けれども初めはごく詰まらないものであっても、後の発展によっては、案外面白

いものとなり得ることがあるのは、物質界でも精神界でもしばしば見られるのだ。闇の中で私に惨殺された無数の思いつき（それらは、高く風に飛ぶ無数の蒲公英たんぽぽの種子のように、闇の中に舞い散って、再び帰って来ない）の中には、そうした類のものだって多少は交じっていたろうと考えるのは、自惚に過ぎるだろうか？

さて、数年の間こうして、私の精神が潑刺として来ようとする時には、それを眠らせようと力め、それが眠く朦朧もろろとしている時にのみ、それを働かせようとした。いや、精神をば全然働かせまいと力めたのだ。（何のため

に？ 身体のために。それで身体はよくなったか？ どうして、どうして。少しもよくなんかなりはしない。）私はこの馬鹿げた企くわだてに成功した。本当の睡眠も本当の覚醒も私からは失われた。私の精神はもはや再び働く力を失い、完全に眠り・沈み・腐った。精神の缶詰、腐った缶詰、木乃伊みいら、化石。

これ以上完全な輝かしい成功があるうか。



昨夜就寝する頃から少し胸苦しかったが、夜半果して例の発作に襲われて、起上る。アドレナリン一本をうち、朝まで床上に坐っている。呼吸困難はややおさまったが、頭痛甚<sup>はなは</sup>だし。朝になってまだ不安なので、エフエドリ<sup>ン</sup>八錠服用。朝食は摂らず。息苦しきため横臥する能<sup>あた</sup>わ<sup>ず</sup>。終日椅子に掛け机に凭<sup>よ</sup>り、カメレオンの籠を前に、頬杖をついて眺める。

カメレオンも元気なし。鳥の止り木にとまり、小さ

な眼孔からじつとこちらを見ている。動かず。瞑想者の風あり。尾の捲き方が面白い。木をつかんでいるゆびは、前三本、後二本。体色は余り変化しないようだ。全く異った環境に連れ込まれたために、これに応ずる色素の準備がないのか？

眺めているうちに、ものが段々と、*sub specie chameleonis* に見えて来そうだ。人間としては常識として通っていることが、一つ一つ不可思議な疑わしいことに思われて来る。頭痛は依然止まず。おおむね鈍痛だが、時にツキツキと劇しくなる。

頭痛の合間にきれぎれにうかぶ断想。

俺というものは、俺が考えているほど、俺ではない。俺の代わりに習慣や環境やが行動しているのだ。これに、遺伝とか、人類という生物の一般的習性とかいうことを考えると、俺という特殊なものではなくってしまいそうだ。これは云う迄もないことなのだが、しかし普通没我的に行動する場合、こんな事を意識している者は無い。ところが私のように、全力を傾注する仕事を有<sup>も</sup>たない人間には、この事が何時も意識されて仕方がない。しまい

には何が何やら解らなくなつて来る。

俺というものは、俺を組立てている物質的な要素（諸道具立）と、それをあやつるあるものとで出来上つている器械人形のように考えられて仕方がない。この間、欠伸あくびをしかけて、ふと、この動作も、俺のあやつり手の操作のように感じ、ギョツとして伸ばしかけた手を下した。おろ

ひとつき一月ほど前、自分の体内の諸器関の二つ二つについて、（身体模型図や動物解剖の時のことなどを思い浮かべながら）その所在のあたりを押して見ては、その大きさ、

形、色、湿り具合、柔かさ、などを、目をつぶって想像してみた。以前だってこういう経験が無いわけではなかったが、それはしかし、いわば、内臓一般、胃一般、腸一般を自分の身体のあるべき場所に想像してみたただけであって、すこぶる抽象的な想像の仕方だった。しかしこの時は、何とかいうか、直接に、私という個人を形成している・私の胃、私の腸、私の肺（いわば、個性をもったそれらの器関）を、はっきりとその色、潤い、触感をもつて、その働いている姿のままに考えてみた。（灰色のぶよぶよと弛ゆるんだ袋や、醜い管や、グロテスクなポンプ

など。)それも今までになく、かなり長い間——ほとんど半日——続けた。すると、私という人間の肉体を組立てている各部分に注意が行き亘るわたにつれ、次第に、私という人間の所在が判らなくなつて来た。俺は一体どこにある？　これは何も、私が大脳の生理に詳しくないから、また、自意識に就いての考察を知らないから、こんな幼稚な疑問が出て来た訳ではなからう。もつと遙かに肉体的な(全身的な)疑惑なのだ。

その日以来こんな想像に耽るふけようになり、それが癖になつて、何かまぎに紛れている時のほかは、自分の体内の器

関共の存在を生々しく意識するようになって来た。どうも不健康な習慣だと思いが、どうにもならない。一体、医者はどういう経験を有つだろうか？ 彼等は自分達の肉体についても、患者等のそれと同様に考えているだけであって、自分の個性の形成に与<sup>あずか</sup>るところの自分の胃、自分の肺を、いつも自分の皮膚の下に意識している訳ではないのではなからうか。

身体を二つに切断されると、すぐに、切られたおのこの部分が互いに闘争を始める虫があるそうだが、自分

もそんな虫になったような気がする。というよりも、まだ切られない中うちから、身体中が幾つにも分れて争いを始めるのだ。外に向って行く対象が無い時には、我と自らを噛み、さいなむより、仕方がないのだ。

私が何事かについて予想をする時には、いつも最悪の場合を考える。それには、実際の結果が予想より良かった時にホツとして卑小な嬉しさを感じようという、極めて小心な策略もあるにはあるようだ。私が人を訪ねようとする、私はまず彼が留守である場合を考え、留守でも落胆しないようにと自分に言いきかせる。それから、



在宅であつても、何か取込とりこみ中ちゆうだとか他に來客がある場合のこと、また、彼が何かの理由で（たとい、どんなに考えられない理由にしろ）自分に対して好よい顔を見せないであろう場合、その他色々な思わしくない場合を想定して、そういう場合の方が好都合な場合よりもより多くあり得ることに思い込み、そうして、そういう場合でも決して落胆せぬように自分を納得させてから、出掛けるのである。

何事についてもこれと同様で、ついには、失望しないために、初めから希望を有つまいと決心するようになった

た。落胆しないために初めから欲望をもたず、成功しないであろうとの予見から、てんで努力をしようと思わず、<sup>はずか</sup>辱しめを受けたり気まずい思いをしたくないために人中へ出まいとし、自分が頼まれた場合の困惑を誇大して類推しては、自分から他人にものを依頼することが全然できなくなってしまう。外へ向って展<sup>ひら</sup>かれた器関をすべて閉じ、まるで掘<sup>ほり</sup>上<sup>あ</sup>げられた冬の球根類のようになるうとした。それに触れると、どのような外からの愛情も、途端に冷たい氷滴となって凍<sup>こお</sup>りつくような・石となろうと私は思った。

我はもや石とならむず 石となりて つめたき海を

沈み行かばや

氷雨ひさめ降り狐火きつねび燃えむ 冬の夜に われ石となる黒き

小石に

眼めと瞑とづれば 氷の上を風が吹く われ石となりてまろ転

びて行くを

腐れたる魚のまなこは 光なし 石となる日を待ち

て吾がゐる

たまきはる いのち寂しく見つめけり つめたき星

の上に独り<sup>ひと</sup>みて

今迄和歌を作ったことのない私が、こんな妙なものを  
書散らしては、自ら球根のうたと<sup>わら</sup>晒うのである。

金魚鉢の中の金魚。自分の位置を知り、自己及び自己  
の世界の下らなさ・狭さを<sup>ちしつ</sup>知悉している絶望的な金魚。

絶望しながらも、自己及び狭い自己の世界を愛せず  
に  
はいられない金魚。

幼い頃、私は、世界は自分を除く外みんな狐が化けているのではないかと疑ったことがある。父も母も含めて、世界すべてが自分を欺す<sup>だま</sup>ために出来ているのではないかと。そしていつかは何かの途端にこの魔術の解かれる瞬間が来るのではないかと。

今でもそう考えられないことはない。それを常にそうは考えさせないものが、つまり常識とか慣習とかいうものだろう。が、それらも私のような世間から引込んでい<sup>る</sup>者には、もはや、そう強い力をもっていない。照明の変化と共に舞台の感じがまるで一変するように、世界は、

ほんのスイッチの一ひねりで、そういう幸福な（？）世界ともなり得るし、また同じ一ひねりで、荒冷たる救いのないものともなる。私にとってそのスイッチが往々にして、呼吸困難の有無であり、塩酸コカインやヂウレチンのききめ加減、天候の晴雨、昔の友人からの来信の有無等である。

大きな——時に不可解な——ものの中に（組織、慣習、秩序）あんじよ晏如と身を置いている気易さ。

そういうものから、すっかり離れている自由な人間の

苦しき。

そういう自由人は、自己の中で人類発展の歴史をもう一度繰返して見なければならぬ。普通人は慣習に無反省に従う。特殊な自由人は、慣習を点検してみても、それが成立するに至った必然性を実感しない限り、それに従おうとしない。いわば、彼は、人間がその慣習を形作るに至った何百年かの過程を、一応自己の中に心理的に経験してみないことには気が済まないのである。

私自身の性情も、傾向としては、それに似たものを有っているようだ。そういう特殊の人達に往々見られる優

れた独創的な思考力だけは欠いて。

友人の一人が「遠交近攻きんこうの策」と評した一つの傾向。一生懸命になって巴里パリの地図をこしらえたりして頭の中では未知の巴里の地理に一かど精通しているくせに、もう二年も住んでいるこの港町の著名な競馬場へも、ひとりでは行けない。博物の教師のくせに博物のことはろくに知らず、古い語学を嚙かじってみたり、哲学に近いものを漁あさってみたりする。それでいて、何一つ本当には自分のものにしていないだらしなさ。全くのところ、私のももの



見方といたったって、どれだけ自分のほんものがあるろうか。いそつぶの話に出て来るお洒落鴉しやれがらす。レオパルデイの羽を少し。シヨペンハウエルの羽を少し。ルクレティウスルクレティウスの羽を少し。荘子や列子の羽を少し。モンテエニユの羽を少し。何という醜怪な鳥だ。

（考えてみれば、元々世界に対して甘い考え方をしていた人間でなければ、厭世観えんせいかんを抱くわけもないし、自惚やか、自己を甘やかしている人間でなければ、そういつも「自己への省察」「自己苛責かしゃく」を繰返す訳がない。だか

ら、俺みたいに常にこの悪癖に耽るものは、大甘々の自おおあまあま惚やの見本なのだろう。実際それに違いない。全く、私、私、と、どれだけ私わがが、えらいんだ。そんなに、しよつちゆう私わがのことを考えてるなんて。）

#### 四

今日も勤めのない日。火、水、木、と三日、休みが続くのである。昨夜はやや眠れた。発作への懸念（ほとんど恐怖といってもいい）もまず無くなる。持薬まきようかんの麻杏甘

石湯せきとうの分量を少し増す位で済みそうである。鈍い頭痛は依然去らない。午前中嘔気はきけ少々。

カメレオンは一昨日から蠅を十二三匹しか喰べていない。止り木から下りて、綿の上に蹲うずくまっている。寒いのである。これでは長くもつまいと思う。いよいよ仕方  
がなければ動物園へ持って行くことにしよう。後肢うしろあしの  
つけねの所に小さい黒褐色こくかつしよくの傷痕がついている。学校  
で床へ落ちた時に傷いためたのだらうか。背中のギザギザは  
ハンド・バッグの口に使うチャックに似ている。

今日も午前中ずっと小爬虫類を前に、ぼんやり頬杖を  
ついていた。少し眠い。前の晩に全然眠れなかった日よ  
り、なまじ一・二時間眠れた次の日の方が眠いのである。  
うとうとしかけてハッと気がついた瞬間、目の前のカメ  
レオンの顔が、ルイ・ジユウベエ扮ふんするところの中世の  
生臭坊主に見えた。カメレオンとみのむし蓑虫との対話というレ  
オパルデイ風のものを書いてみたくなる。蓑虫の形而上  
学的疑惑、カメレオンの享樂家的逆説。……等々……。但ただ  
しもちろん本当に書きはしない。書くということとは、ど  
うも苦手だ。字を一つ一つ綴っている時間のまどろっこ

いさ。その間に、今浮かんだ思いつきの大部分は消えてしまいい、頭を掠めた中の最もくだらない残滓が紙の上に残るだけなのだ。

午後、ふと頁ページをくつたある本の中に、自分の精神のあり方をこの上なく適切に説明してくれる表現を見つけた。

——人間の分際というものの不承認。そこから来る無気力。拗ねた理想の郷愁。気を悪くした自尊心。無限を垣間見、夢みて、それと比較するために、自分をも事物

をも本気にしない……。自己の無力の感じ。周囲の事情を打破る力も、強<sup>し</sup>いる力も、按排<sup>あんばい</sup>する力も無く、事情が自分の欲するようになっていない時には、手を出すまいとする。自分で一つの目的を定め、希望をもち、闘って行くという事は、不可能な・途方もない事のように思われる。――

私は本を閉じた。これは恐ろしい本だ。何と明確に私を説明してくれることか！

何とかしなければならぬ。これではどうにも仕様がな

い。このままでは、生きながらの立消だ。たちぎえ 次第に俺は、俺という個人性を稀薄きはくにして行つて、しまいには、俺という個人がなくなつて、人間一般に歸してしまいそうだぞ。冗談じようだんじゃない。もっと我執がしゆうをもて！ 我慾を！ 排他的に一つの事に迷い込むことが唯一の救いだ。アミエルの乾物ひものになるな。自分で自分のあり方を客観的に見ようなどという・自然に悖もとつた不遜な真似は止めろ。無反省に、ずうずうしく（それが自然への恭順だ）粗野な常識たつとを尚たつとび、盲目的な生命の意志にだけ従え。

夕方、吉田が訪ねて来る。大變激昂した様子である。以前から彼との間にいざこざの絶えなかつた体操の教師が、今日「ちよつと顔を貸してくれ」と、吉田を雨天体操場の控室に呼び込んで、乱暴な言葉で彼をなじり、脅迫的な態度に出たという。憤慨した吉田がすぐに校長の所へ話を持って行つたところ、校長ももちろん体操教師の乱暴を非難しはしたが、それでも、暗あんに、喧嘩両成敗といった考えを仄ほのめかしたとかで、彼は非常に不満なのだ。「辞めてもええのんや」と繰返している。たしか、以前まえにも二三回、彼はこうした事から「辞める」と騒ぎ出し、



職員全部にそれをふれて廻ったが、結局辞めなかった。あとになるとケロリとしている。ただもうカツとなると、皆の所へ行って騒ぎ立て、繰返し繰返し愚痴を聞かせ、自己の正当と相手の不当とを認めて貰わなければ気が済まないのである。しかし、彼はいくら腹を立てた時でも、決して自分の損になること（殴り合いをしたり、思い切った辞職したり）はしない。今日とて、ただ、私のアパアトが学校の近くにあるために、帰りに立寄って、それほど親しくもない私ではあるが、それでも一人でも多くの者に自分の正当さを認めて貰おうとしただけなのだ。

辞める心配は絶対に無い。余り騒ぐと後あとで引込がつかなくなり、てれ臭い思いをせねばなるまい、との心配も彼にはない。てれるなどという事を彼は知らないからである。ただ、どんな場合にも、目に見えた損だけはしないように振舞っているのは、彼の身についた本能なのであろう。

一通りの憤慨がすむと、まず気が済んだという態ていで、今度は、昨日、ある先輩から紹介されて、県の学務部長に会いに行った話を始めた。学務部長が非常に款待かんだいしてくれて、また遊びに来給え、と肩を叩かんばかりにして

くれたこと、だから、これからも時々うかが伺おうと思っ  
 ていること、この学務部長さん（彼はさんをつけ、このよ  
 うな高官に衷心からの尊敬を抱かないような人間の存在  
 は、想像することも出来ない様子である）は従じゆ×位、勲くん  
 ×等で、まだ若いからもっと大いに出世されるであろう  
 こと、この人の夫人の父君が内閣の某高官であることな  
 ど、恐懼きようくに堪えないような語り口で話した。全く、先刻さつき  
 の悲憤をまるで忘れてしまったような幸福げな面持であ  
 る。

吉田が帰ってから、幸福ということをちよつと考へてみる。躍氣となつて騒ぎ立て他人に自分の立場を諒解して貰うことが、彼にとつての幸福であり、役人と近づきになることが彼の最大の愉快なのだ。それを嗤う資格は私には無い。嗤つたとしても、それでは、私にどんな幸福があるというのだ。「衆人熙々トシテ大牢ヲ享クルガ如ク、春、台ニ登ルガ如シ。我独り怕兮トシテ、嬰兒ノ未ダ咳ハザルガ如ク、僵レテ歸スル所ナキガ如シ。俗人昭々トシテ我独り昏キガ如ク、俗人察々トシテ我独り悶々タリ。……」学務部長に随喜の涙を流す吉田の姿が、

急に、皮肉でも反語でもなく、誠にこの上無く羨ましいものに思われて来た。

夜、床に就いてから、先刻の吉田の、脅迫云々の言葉を思い出し、向うっ気はすこぶる強いが腕力の無い吉田が、その時どんな態度をとったか、と考えてみたら、おかしくなつて来た。自分だったらどうするだろうと、考えてみた。

まことに意気地の無い話だが、私は、暴力——腕力に對して、まるで対処すべき途を知らぬ。もちろん、それ

に屈服して相手の要求を容れるなどという事は意地からでもしないけれども、たとえば、殴られたような場合、どんな態度に出ればいいのだろう。こちらに腕力が無いから殴り返す訳には行かぬ。口で先方の非を鳴らす？　そういう時の自分の置かれた位置の惨めさ、その女のような哀れな饒舌じょうぜつが厭いやなのである。その位なら、いつそ超然と相手を黙殺した方がまじだ。しかしその場合にもなお、負惜まけおしみの的な弱者の強がりぼうじんが、（傍人ぼうじんに見えるのは差支さしつかえないとして）自分に意識されて立派とは思えない。というよりも、私は、他人との間に暴力的な

關係に陥つたという・その事だけで、既に、心中の大變じょうらんな擾乱・動搖を免れない。暴力への恐怖は動物的本能だとか、暴力の實際の無意義さとか、暴力行使者への輕蔑とか、そんな議論はこの際三文もんの値打もなく、私の身体は顫え、私の心はただもう訳もなくベソをかいてしまふのである。暴力の侵害（腕力ばかりでなく、思いがけない野卑な悪意、誤解などもこれに入れていい）に打克うちかつだけの力を備えているのは結構に違いないが、相手に對抗し得る腕力・權力を有たないでいて、（あるいは有つていても、それを用いずに）ただ精神的な力だけで悠揚ゆうよう

と立派に対処し得る人があれば、尊敬してもいいと思う。それはどんな方法によるか、私には想像もつかない。色々な有名な人物を考えてみても、その社会的な背景を剥ぎ<sup>は</sup>去って暴力の前に曝<sup>さら</sup>した場合に立派に対処できそうな人はなかなか思い当たらないようだ。

## 五

カメレオンはいよいよ弱って来たようで、後肢のつけ根の所の傷も、気のせいかな昨日より拡がったように思わ



れる。胴が鮎などよりも薄い位で、細い肋骨の列が外から見え、時々咽喉の辺あたりをふくらませるのも何か寒そう  
で痛々しい。矢張動物園へ持って行こうと決心する。動物園は好きな場所だが、寄附する、とか、預ける、とか、  
いう話になると、いずれ東京市のお役人が出て来て、届とどけ  
を書かせたりするのではないか。役人と、役所の手続き  
ほど、やり切れないものはない。実際は簡単だと人の言  
うものでも、役所への届とか手続きとかとなると、私は  
頭から煩瑣はんさなものに感じて、まるで考えてみる気もしな  
くなるのである。仕方がないから、東京から通かよっている

地理の教師のY君に頼んで上野へ持って行ってもらおうと思う。学校の方ではもうこんな虫のことなんか忘れているだろうから、断るにも及ぶまい。元のように、綿を敷いた箱に入れ、箱の蓋に息抜きの穴をあけて、学校へ持って行く。金曜だから、勤めのある日だ。

Y君に会って、訳を話して頼む。承知してくれる。今日帰りに真直まつすぐに上野迄行こうと言う。

昼休に、食事を済ませたからしばらく職員室にいと、廊下で何か生徒等が騒ぎ始めたと思ったら、やがて扉があいて、去年の春結婚のために辞めた音楽の教師が、赤

ん坊を抱いてはいつて来た。「アラツ」と、それを見た女の教師達は一斉に声を挙げた。関西に嫁いで行っているのだが、主人が上京するのについて来たついでに寄つたのだという。さて、それからこの遠来の客に対する彼女達の——殊に未婚の老嬢達の挙動、表情、つまり外観にまで現れる彼女等の心理的動揺は、まことに興味深きものであった。「赤と黒」の作者の筆をもつてしても、恐らくはなおその描写に困難を覚えようと思われた。羨望、嫉視しつし、自己の前途への不安、酸っぱい葡萄式の哀しい矜恃きようじ、要するにこれらのすべてを一緒にした漠然たる

胸騒ぎ。彼女等は口々に赤ん坊（全く、色が白く、可愛く肥っていた）の可愛らしさを讚めながら、男性には想像も出来ない貪婪どんらんな眼付をもつて、幸福そうな若い母を、一年前とはすっかり変ってしまった髪かたちを、見違えるほど派手になったその服装を、（学校に勤めていた時は洋服だったのに、今日は和服である）——そうして、それらすべてから読み取らるべき生活の秘密をむさぼるように探ろうとする。赤ん坊を抱き取って、あやしなからその顔に見入る眼差まなざしに至っては、子供一般に対して婦人の有つ愛情とは全く別な激しさをもつて爛々と燃え、

複製を通じて原画を想像しようとする画家の眼といえども、到底この熱烈さには及ぶまい。

三十分ばかり話してから帰って行ったこの若い母親と色白の男の赤ん坊とは、老嬢達の上に通り魔のような不思議な作用をはたらき残して行った。午後を通じて、ずっと、独身の女教師達の落着きの無さは、とかくこうした事の気のつかない私のような者にも明らかに看取された。人間の心理的動搖が気圧に何かの影響を及ぼすものだとしたら、午後の職員室のこのモヤモヤしたものは、確かに晴雨計の上に大きな変化を与えているに違いないと思われ

た。老嬢達は数年前から同じ職員室の同じ机の前に腰掛  
け、同じ教室で同じ事柄を生徒に説き聞かせている。来  
年も更来年も、恐らくはまたその次の年も、神々の属性  
の一つである「絶対の不変性」をもってこれを繰返すで  
あろう。そのうちに彼女達の中に在った、ほんのわずか  
の貴いものも次第に石化して行き、ついには、男とも女  
とも付かない——男の悪い所と女の悪い所とを兼ね備え  
た怪物、しかも自分では、男の良い所と女の良い所とを両  
つながら有っていると自惚れている怪物に成上ってしま  
う。

今日職員室を訪れた若い母親——先の音楽の教師は、去年私がこの学校へ来てからひとつき一月ほどして職を辞したのである。その頃の先生としての彼女と、今日の母親としての彼女とを比べて見る時、——音楽の先生というものは、他の学課と違って遙かに自由な派手な、教師臭くないものではあるが、——それでも、今日の方が一年前よりいかに楽しげに明るく、若々しく見えたことだろう。教師という職業がしらずしらず不知不識の間に身につけさせる固さ。ボロを出さないことを最高善と信じる習慣から生れる卑屈な倫理観。進歩的なものに対する不感症。そうい

うものが水垢みずあかのようみずあかにいつの間にか溜ためって来るのだ。「学校の先生が、生徒でない一人前の大人と話をする時には、リリパットから帰って来たガリヴァアのように、理解力の標準を換算するのに骨が折れる」と、ラムは言う。理解力だけだったら、こんな幸いな事はない。

## 六

カメレオンの籠には、もうカメレオンはいない。綿が元のままに敷かれ、止り木も元のままにかかっている。



去年の春から、一年半ばかりの間に、この籠に三種の動物が住んだ。最初は、黒い眼の周囲を白く縁取った・見るからにいたずらっ兎らしい黄牡丹きぼたんインコの番つがいである。これは一年近くいたが、一羽が病氣(?)で死んだので、残った方も人にやってしまった。次は、翼が藍あいで胸の真紅な大きな鸚鵡おうむ。これはかなり立派で、止り木にとまったままうつらうつらとうたた寝するところなど、仲々に渋いものがあり、娼婦の衣裳を纏まとうた哲学者だ、などと喜んでいたのだが、とうとう餌のやり忘れで死なせてしまった。最後がカメレオンで、これは五日間しか

いないで、動物園へ行ってしまった。寂しいというほどではないが、余り愉しい気持ではない。

授業の無い日だが、Y君に昨日の様子を聞くために学校へ行く。Y君の話によると、動物園でも大変喜んで受けてくれた由。「大変大きいカメレオンですね。うちに今いる奴はほとんどこの半分位しかありませんよ」と言っていたそうだ。なお、死んだ場合には剥製用として学はくせいよう校の方へ送ってもらおう約束にして来たという。Y君に礼を云って、帰ろうとすると、「夕方から南京町でK君の

ために祝いの会をすることになっていいるから、出てくれないませんか」と言われた。出席するむね返事して学校を出る。

K君は二週間ほど前、英語の高等教員検定試験に合格したのである。この間カメレオンを貰った日に、K君の受持の生徒が二三人、おせつかいにも次のような話を私に告げてくれた。何でもその前々日かの昼休の時K君が受持の級クラスへ行つて、「昨日の○○新聞の神奈川版に少し見たい所があるんだが、君達の中で誰か家うちにそれがあつたら持つて来てくれませんか」と言ったのだそうだ。

それで級の者が何人か家からその日附の神奈川版を持って来て見たところ、そこには、小さくではあったが、「Y女学校のK教諭見事高検にパス」と出ていたのだという。「それをわざわざ私達に知らせる為に持って来させたのよ。いやんなつちやうわ。ほんとに。」と生徒の一人は、生意気な口をきいた。いくら若くても、まさか、とは思うが、そういうえば、そんな莫<sup>ぼ</sup>迦<sup>か</sup>げた真似もやりかねない程のK君の有頂天ぶり（得意気に試験の模様を皆にふれ廻ったり、急に、女学校の教師なんか詰まらないと言出して見たり）であつた。

人間はいつまでたってもなかなか成人おとなにならないもの  
だと思う。というより、髭ひげが生えても皺しわが寄っても、結  
局、幼稚さという点ではいつまでも子供なのであって、  
ただ、しかつめらしい顔をしたり、勿体もったいをつけたり、幼  
稚な動機に大層な理由づけを施してみたり、そういう事を  
覚えたに過ぎないのではないか。誰も褒めてくれないと  
いってべそをかいたり、友達に無意味な意地悪をしてみ  
たり、狡猾ずるをしようとしてつかまったり、みんな子供の  
言葉に翻訳できる事ばかりだ。だからK君の愛すべき自  
己宣伝なども、かえって正直でいいのだと思う。

帰途、山手の丘を廻ってみる。

まだ十時頃。極く薄い霧がずうっと立たちこ罩めて、太陽は

空に懸っているのだが、見詰めてもさほど眩まぶしくない。

磨すり硝子めく明るい霧の底に、四方の風景が白っぽく淀ん

でいる。昨夕から引続いて、風は少しも無い。四辺あたりの白

さの底に何か暖いほんのりしたもののさえ感じられる。

ポケットが重いので手をやってみると本がはいっている。出してみるとルクレティウスである。今朝着て来た上着は久しく使わなかった奴だから、この本もいつポケットに入れて持ち歩いたものやら記憶がない。

クライスト・チャアチ  
 基督教会の蔦が葉を大方落し、蔓だけが静脈のよう  
 に壁の面に浮いて見える。コスモスが二輪、柵に沿って  
 ちぢれながら咲残っている。海は靄ではつきりしないが、  
 大きな汽船達の影だけはすぐに判る。時々ボーボーと汽  
 笛が響いて来る。

代官坂の下から、黒衣を被いた天主教の尼さんが、ゆ  
 つくり上って来る。近附いた時に見ると、眼鏡をかけた  
 ・鼻の無闇に大きな・醜い女だった。

外人墓地にかかる。白い十字架や墓碑の群がった傾斜  
 の向うに、増徳院の二本銀杏が見える。冬になると、裸

の梢しようしよう々が渋い紫褐色しかつしよくにそそけ立って、ユウゴウか誰か古い仏蘭西人の頬髯をさかさまにしたように見えるのだが、今はまだ葉もほんの少しは残っているので、その趣おもむきは見られない。

入口の印度人インドの門番にちよつと会釈して、墓地の中にはいる。勝手に知った小径小径をしばらくぶらつき、ジョージ・スイドモア氏の碑の手前に腰を下す。ポケットからルクレティウスを取出す。別に読もうという訳でもなく、膝に置いたまま、下に拡がる薄霧うすぎりの中の街や港に目をやる。



去年のちようど今頃、やはり霧のかかった朝、この同じ場所に坐つて街や港を見下したことがあつた。私は今それを思い出した。それが何だか二三日前のことのような気がした。というより、今もその時から続いて同じ風景を眺めているような変な気がした。私の心に時々浮かんでくる想像——一生の終りに臨んで必ず感じるである。う・自分の一生の時の短かさ果敢なさの感じ（本当に肉体的な、その感覚）を直接じかに想像してみる癖が、私にはある——が、またふつと心を掠かすめた。一年前が現在とまるで区別できないように思われる今の感じが、死ぬ時の

それに似たものではないかと思われたからである。坂道を駈降かけおりる人のように、停とまれば倒れるのでやむをえず走り続けて行く、そういうのが人間の生涯だ、と云ったのは誰の言葉だったろう。

少し隔へだたったところにごく小さい十字架が立っている。前に鉢植のヂェラニウムが鉢ごと埋いけられている。

十字架の下の、書物を開いた恰好かつこうの白い石に、**TAKE**  
**THY REST** と刻まれ、生後五ヶ月という幼児の名が記されている。南傾斜の暖かさでヂェラニウムはまだ鮮かな紅い花を着けている。

こういう綺麗な墓場へ来るとかえって死というものの暗さは考えにくい。墓碑、碑銘、花束、祈禱、哀歌など、死の形式的な半面だけが、美しく哀しい舞台の上のことのように、浮かび上ってくるのである。

エウリピデスの作品の中の一節。ヒポリュトスのママはは継母のファイドラが不倫の愛情に苦しんで臥ふせっている傍で、彼女の乳母が、まだその理由を知らないながらに、彼女を慰めている。

「人間の生活というものは、苦しみで一杯でございませぬ。その不幸には休みというものがございませぬ。し

かし、もし人間のこの生活よりもっと快いものが仮りにあるとしても、闇がそれを取囲み、我々の眼から隠してしまっています。それにこの地上の存在というものは燦<sup>かがや</sup>かしいように見えますので、私共は狂人のようにそれに執着するのでございます。なぜと申しまして、私共は他の生活を存じませんし、地下で行われてゐることについては何も知る所がございませんから。」

こんな言葉を思出しながら、周囲の墓々を見廻すと、死者達の哀しい執着が——「願<sup>ねが</sup>望はあれど希<sup>のぞ</sup>望なき」彼の吐息が、幾百とも知れぬ墓処の隅々から、白い靄と

なつて立昇り、そうして立罩めているように思われる。

ルクレティウスをついに開かないままに、私は腰を上げる。海の上の烟けぶった灰色の中から、汽笛がしきりに聞えてくる。傾斜した小径を私はそろそろ下り始める。

(昭和十七年十一月)



日本文学電子図書館

---

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行

---



日本文学電子図書館